



東北お遍路
TOHOKU OHENRO

第三回 東北お遍路写真コンテスト
第二回 東北お遍路俳句コンテスト

作品集

東北お遍路俳句コンテスト選考委員



黒田 杏子 氏



夏井 いつき 氏

俳句

東北お遍路写真コンテスト選考委員



写真

青柳 健二 氏 / 齋藤 康一 氏 / 結城 登美雄 氏

2018



東北お遍路巡礼地について

東北お遍路プロジェクトは、2011年3月11日に発生した東日本大震災により、被害を受けた福島県いわき市から青森県八戸市までの沿岸地域に、慰霊と鎮魂の道を作ろうと、2011年9月に発足しました。四国遍路が1300kmあるのに対し、リアス式の海岸をゆく東北お遍路は1700kmの道のりとなります。

2012年には「千年先までも語り継ぎたい津波の被災地」を公募。以来、集まってきた候補地を3年かけてメンバーが現地を訪問して検証しました。こうして絞り込まれた105カ所の候補地を、有識者による創生委員会を経て、2015年2月に53カ所の「東北お遍路巡礼地」として発表し、翌年に10カ所を追加、現在63カ所になっております。

東北は幾度も津波の悲劇に見舞われましたが、今回の大災害を経てあらためて思うことは、「語り継ぐことが、最大の防災である」ということです。

そこで東北お遍路プロジェクトは、千年先まで語り継ぎたい物語を見出して「こころのみのちの物語」として発信する活動しております。また被災地の「今」を切り取る「東北お遍路写真コンテスト」と「東北お遍路俳句コンテスト」も、震災の記憶を風化させないための大切な取り組みのひとつになっていくとともに、被災地への誘客という復興に欠かせない大切な役割も担っていきたく考えています。

やがて民族や宗教を越えた多くの方々に巡礼地を辿って頂くことにより、東北の海岸線に一本の祈りの道ができれば、辛いが前向きに生きた私たちの震災の記憶が、千年先にも語り継がれていくことでしょう。

今後も、東北お遍路プロジェクトは、東北の各被災地が連携して、経済的・文化的に自立発展できる復興の一助となるよう、活動を続けてまいります。

一般社団法人東北お遍路プロジェクト代表・新妻香織

第3回東北お遍路写真コンテスト／第2回東北お遍路俳句コンテストのご挨拶と経過について

2018年6～9月に第3回東北お遍路写真コンテストと第2回東北お遍路俳句コンテストの募集をしましたところ、北海道から沖縄まで、写真の部が146点、俳句の部が815句のご応募をいただきました。ご参加の皆様に感謝申し上げます。

写真、俳句とも、今年もテーマを「東北お遍路巡礼地にまつわるもの」といたしました。写真は10月21日福島県広野町公民館に斎藤康二先生、青柳健二先生、結城登美雄先生と審査員が会して厳正に審査が行われました。俳句は黒田杏子先生、夏井いつき先生に全作品をお送りし、各々選考いただきました。

震災から8年が経過し、東日本大震災が風化しつつある現在ですが、実際に被災地に足を運ばれてシャッターを押し、あるいは句を詠んだ様子がしつかり伝わる多くの作品に出会えたことは、コンテストを主催する者には大変うれいことでした。作品には、前を向いて歩む地、まだスタート地点に立えない原発事故地など、「被災地の今」が切り取られていると同時に、皆様の暖かな眼差しや祈りが込められているように思い、心を熱くしました。

また、今回の入賞作の最初の発表と表彰式は、11月1～4日、仙台市地下鉄東西線国際センター駅多目的ホールで、「第2回東北お遍路展」として開催いたしました。表彰式には遠方からもご参加くださいますので、どうぞお運びくださいますようお願い申し上げます。次回は皆様のご参加をお待ち申し上げます。



仙台市で開催された第2回東北お遍路展

目次

第2回俳句コンテスト作品

黒田 杏子 選 「入選15句」
夏井 いつき 選 「入選15句」
その他の俳句30句

第3回写真コンテスト作品

審査員総評
入選作品と選評
当選者発表



黒田 杏子 氏 選評

この俳句コンテストは成功しました。

このような大会は第二回がとても重要なのです。どのような状況になるのか見守っていましたが、投句数は第一回より少なかったのですが、寄せられた作品のレベルはぐんと向上しています。老若男女の方々の投句を丁寧に見見しましたが、静かな落ち着いた句の中に心に残る秀吟がいくつもありました。この企画に沿った作品を作るために吟行をされた作品も数多く見受けられました。このような俳句大会は全国に例がありません。第三回が楽しみです。皆様のご健吟をお祈りいたします。

天

月見草宙に現はる過去の街

吉川 香廉（岩手県盛岡市 41歳）

幻想的な句となっていますが、被災の街を見事に詠みあげています。月見草の季語のあつせんが実に効いています。

地

夏潮の香の満ちてをり瑞巖寺

半田 良浩（栃木県宇都宮市）

静かな句ですが、臨場感があり、心に残る一行。名刹の句として新鮮です。

人

菊手向けるひとつひとつの人生に

南部 努（宮城県仙台市 67歳）

作者の思いが一行十七音字によく行き渡った感動的な作品になっています。

受け止める術の無き身や野分吹く

小松 隆碧（宮城県多賀城市 70歳）

作者の実感がはつきり打ち出されているところにこの一行の価値があります。

草茂るジャズ喫茶店跡潮騒

菊地 十音（岩手県盛岡市 83歳）

ジャズ喫茶店跡に焦点を当てて、この句決まりました。作者の感性鋭敏です。

入選

荒波に手を合わせれば天の川

海老沢 法導（宮城県仙台市 69歳）

盆東風や重機磨かれて休む

木寺 洋子（東京都 63歳）

浜人の笑顔頼もし風爽やか

田代 フサエ（群馬県伊勢崎市 85歳）

駅舎なき駅に人立つ盆の波

二階堂 光江（岩手県盛岡市）

原子炉をただ見下ろして盆の月

掘 卓（福島県いわき市）

追悼の岬を巡る人に花

齋藤 美保女（福島県郡山市 63歳）

観音も行き合う人も菊の中

藤原 知子（東京都 75歳）

戻る道あけてあるよと月明かり

羽矢 真人（千葉県富津市 74歳）

言葉なく涙流せず大花野

豊島 喜美子（岩手県宮古市 62歳）

立ちあがれ故郷の空と百日紅

岸 浩子（岩手県陸前高田市 62歳）



夏井いつき氏 選評

天 松植えて植えて相馬に着く厄日

安達 英雄 (宮城県仙台市 77歳)

相馬の防風林を再生する活動としての「松植えて」でしょう。「松植えて植えて」のリフレインは、黙々と植える汗と願いを読者の心に想起させます。下五「厄日」に立ち向かう意志を、強く受け止めさせられた作品です。

地 八年目の稲の香まつすぐ太平洋

林 美佐子 (宮城県仙台市 79歳)

ここまでの年月の格闘と苦勞を「稲の香」が吹き飛ばします。気持ちよいのは「まつすぐ」という措辞。眼前の「太平洋」の広がり。海の青さ。穂波の黄金色との対比は言わずもがな。「八年目」という数詞の感慨深さ。

人 あはゆきや津波ここまでてふ表示

小野寺 雅美 (宮城県仙台市 44歳)

「あはゆき」は春の雪。あの「津波」がここまで来たという「表示」の板に、降っては砕ける淡雪です。「ここまで」来た怖ろしい波の記憶を癒やすように降る淡雪。そこに佇む作者の思いは如何ばかりでしょう。

汚染牧場春の仔牛が生まれたよ

大内 秀夫 (福島県相馬市)

「汚染牧場」と呼ばれた牧場にも春が訪れます。「春の仔牛が生まれたよ」という吹きは弾む希望のようでもあり、切ない響きにも聞こえます。この仔牛がすくすくと育っていきける「春」であることを切に願います。

喪あけ無き海喪あけ無き盆の波

曾根 新五郎 (東京都 63歳)

「喪あけ無き」のリフレインが読み手の心にしみじみとした悲しみを伝えます。「喪あけ無き海」から「喪あけ無き盆の波」へ焦点が絞られる構成も見事。「盆」の潮の香がつんと心の裏に触れる一句です。

入選

たんばばに空の広がり龍昌寺

柴田 昌子 (青森県青森市 77歳)

半島に再会果す浜昼顔

菊池 節子 (岩手県盛岡市 83歳)

見はるかす花野となりて津波跡

豊島 喜美子 (岩手県宮古市 62歳)

駅舎なき駅に人立つ盆の波

二階堂 光江 (岩手県盛岡市)

海望む児童会室夏休み

菊地 十音 (岩手県盛岡市 83歳)

蟻右往左往す末の松山に

増田 信雄 (埼玉県さいたま市 80歳)

観音も行き合う人も菊の中

藤原 知子 (東京都 57歳)

水澄んでもつとやはらか磨崖仏

梅田 昌孝 (愛知県名古屋 65歳)

ここまでき積み上げし石鯛雲

満保 千里 (富山県高岡市)

秋の水を満たしてもひとり

半田 真理 (栃木県宇都宮市)

選外作品二十六句

その海をやうやく見たり百日紅

木寺洋子（東京都）

三月やトランペットの鎮魂歌

鈴木梨花（青森県八戸市）

遍路宿髭ていねいに剃つてをり

青木美葉（大阪府堺市）

冷まじや二基となりたる津波の碑

今順子（青森県八戸市）

語らぬ樹語れぬ人やつくつくし

阿部ゆき子（岩手県盛岡市）

ふるさとはただの原つば墓洗ふ

皆川ミエ子（岩手県盛岡市）

羅漢様と海を巡礼浜豌豆

岸浩子（岩手県陸前高田市）

さやけしや沖に二艘の広田湾

齋藤スミ子（岩手県盛岡市）

海の名をもつ子六歳鐘涼し

佐野享保（宮城県大崎市）

指濡らしつつ秋の海輝かす

松澤ふさ子（宮城県仙台市）

白南風や灘に四股踏む秀の山

村上つね子（宮城県気仙沼市）

新しき町に駅舎や小鳥来る

池添怜子（宮城県仙台市）

アスファルトに蹄鉄の痕夏の果て

永井径（福島県南相馬市）

相馬路や馬糞を避けて往く遍路

桑原秀美（福島県郡山市）

生も死も一文字春の海の黙

長瀬道子（茨城県取手市）

雁や鈴振り巡る北の浜

中野笙子（茨城県牛久市）

櫛抜けの仮設に残り秋刀魚の火

橘家玉蔵（埼玉県さいたま市）

みちのくの蔭をひろって秋遍路

曾根新五郎（東京都）

会へるならオモチャをあげる竹の春

手嶋建元（東京都）

戻る道あけてあるよと月明り

羽矢真人（千葉県富津市）

美事なる蜘蛛の巣かかり廃校舎

高橋富久江（千葉県）

夏菊に集くこの世の光かな

迪方温答（神奈川県）

横綱の像を洗ひし春の波

久保田聡（神奈川県川崎市）

公国の耐震強化小鳥来る

有瀬こうこ（大阪府池田市）

教会の庭に小さな運動会

高橋英夫（宮城県仙台市）

携帯の地震警報冴え返る

新谷香織（福島県相馬市）

審査員総評

❖ 齋藤 康一〔写真家〕

東北お遍路の巡礼地や被災地を見ながら、大勢の方々に東日本大震災の被災地に関心を持っていただくのが当イベントです。今回も復興の様子を伝える写真や被災地を盛り立てるお祭り、また温かみのある写真が多く集まったように思います。このコンテストも3年目と回を重ねることにより、年々、いい作品が集まっているように思います。時とともに消えて行くもの、また復興で新たに生まれるものなど、被災地の現場が切り取られている貴重な写真展だと思っています。

❖ 青柳 健二〔写真家〕

写真コンテストも3回目を迎えて、被写体の変化を感じる。津波の爪痕などの「非日常」の写真から、「日常」の写真への変化といたらいいだろうか。それは復興が確実に進んでいるということでもある。その過渡期の記録という意味でも貴重な作品群であったと思う。ところで、直接の被災地ではないところの写真は、コンテストの趣旨から落とさざるを得なかったのは残念だった。

❖ 結城 登美雄〔民俗研究者／東北お遍路創生委員〕

歳月の経過とともに震災当初の残酷な風景は薄れてきているが、その土地に刻まれた人々の無念の想いは変らない。今回応募の作品にはそれをしっかりと受けとめてシャッターを切るというものが多かったように思える。一見すれば一枚一枚はありふれた風景のように見えるが、かみしめて言葉にすれば、様々な情念がよみがえってくるように思える。これらの写真作品と「お遍路俳句」を合わせ読むことで、伝えるべき震災メッセージは増幅していくのではないかと。東北お遍路プロジェクトの益々の広がりや深化を期待したい。



最優秀賞

藤島 純七（宮城県仙台市）

『復興を願って』 宮城・東松島

【齋藤】

楽しいな上に形のいい作品。ローアングルで青空を入れ込んでいるのがいい。遠近感でにぎやかさを出している。子どもたちが微笑ましく、お母さんの顔が見えていたらさらに良かっただろう。

【青柳】

毎年5月5日に開催されるイベントで、全国から集められた青い鯉のぼりは、復興祈願の象徴だ。鯉のぼりの重なりをうまく切り取ることで、画面の外にもさらに多くの鯉のぼりがあることを想像させる。数の多さは、復興を応援する全国の人々の多さにもつながる。風になびく元気な鯉のぼりは未来や活力を感じさせる。女の子が立っているのど、この鯉のぼりの大きさもわかる。手前に大きく斜めに配された鯉のぼりと、奥の小さい鯉のぼりで奥行きも感じられ、文句なく迫力のある写真になった。

【結城】

失われた家族の命。生きのびた私。見つかった青い鯉のぼり。どうしたらよいか？何ができるのか？惑い、迷いながら青い鯉のぼりを立ててみた。それを見て反応する多くの人々の心があった。その広がり、託された思いが伝わってくる。

優秀賞

佐々木均（宮城県多賀城市）
『伝統の味』 宮城・石巻



【齋藤】
きれいな写真です。火の具合、ハゼの焼け具合、鍋の高さ、女性の表情など、とてもバランスがよいし楽しい。煙のいぶり具合もよい雰囲気を感じています。

【青柳】

ハゼ焼きの様子。ハゼは食べますが、正月の雑煮の出汁を取るのだそう。これが地元の伝統の食文化だ。撮影者はこの文化を面白いと思いついて、この伝統が続くことを願っている。伝統の作業が淡々と行われるのは、震災前に戻っているという確かな証でもあるだろう。その何気ない光景を見る側に印象付けられるかどうかは、写真の強さにかかっている。そういう意味で、屋外から入る光線が、ハゼを輝かせて美しい、強い写真になっていて、訴える力のある作品になっていると思う。

【結城】

自然は津波という厳しさも与えるが、豊かな海の幸も与えてくれる。試練と恵みの間でゆれながら、今年もハゼを焼く。伝統を守っているのではない。自然とともにここで生きていくという思いが、仕事を支えている。

佳作

木村直紀（東京都）
『住田町仮設住宅集会所』 岩手・住田



【齋藤】
被災地から随分離れた仮設住宅の暮らしを切り取った1枚。集会所らしきところで、板の間に座布団もなくしゃがんでいる人々の表情がとてもいい。集いの楽しさが伝わってきます。

【青柳】

これは住田町の木造の仮設住宅での一シーンだそう。住み慣れたところを離れ、苦勞も不便も多いだろうが、光の柔らかさもあり、一息ついたような安堵感が表現されている。

優秀賞

佐藤裕（宮城県仙台市）
『被災工場と日和山』 宮城・名取



【齋藤】
被災した工場を撮った作品ですが、いい時間帯を狙っています。雲の具合や光の具合がいい雰囲気を作っています。上下を大胆にトリミングしたことも成功しています。

【青柳】

被災した工場は、笹かまぼ屋さんだった。これを震災遺産として残そうという意見もあったが、結局、今年中に取り壊されることになったそう。このようにして徐々に、震災の爪痕がなくなっていくことは、つまり復興しているということにもなる。ただこういう大きな災害があったことだけは後世に伝え続けなければならぬだろう。だからここで写真の出番になる。記録としても貴重な写真だし、また重厚感があつて写真的にもすばらしいと思う。

【結城】

長い年月、この浜で漁師とともに生きてきた水産加工の建物。津波で壊されたが解体せずに生かせないか。迷い、ゆれながら8年余。日和山とともに、もうひとつのこの土地のシンボルだったが、今年、復興公園建設のために壊されることになった。残念無念。

鈴木久雄（宮城県仙台市）
『迎春の日』 宮城・名取



【齋藤】
初日の出を撮った写真だが、空の上をもう少し焼き込めば、もっといい写真になった。残念だ。

【青柳】

海岸線に並んで初日の出を拝む人々。各々が違った願いを持ちながらも、初日の出という同じものへの拜む姿に一体感を感じる。

門林泰志郎（福島県いわき市）
『かい浜、今年もありがと』 福島・南相馬



【齋藤】
低めから持っていたいいアングル。子どもたちが「やらされている」楽しさが出ている。遠くの景色もうまく取り込んでいる。

【青柳】

この地域の人たちにとって待ち焦がれた菜の花の前で、撮影者と子どもたちが遊びながら写真を撮っている姿がほほえましい。

三浦りょう子（宮城県名取市）
『月は東に日は西に』 宮城・名取



【齋藤】
復興のための作業をするショベルカーだろうか、同じ形になってないところを見ると、まだ作業中なのだろう。月の出の時間帯がとてもいい。

【青柳】

コメントでは、最初、月明かりで作業しているのかと思つたらしい。右の重機前には作業員の姿も見え、暗くなるまでの仕事の大変さを思う。

横山光太郎（宮城県仙台市）
『蒲生干潟の小さな日和山』 宮城・仙台



【齋藤】
平凡に見えるが実に考えて撮影されていて上手い。本来なら白い杭は目障りなはずだが、陽の当たるとヒマワリなど色のはっきりしたものがうまい具合に散らしてある。

【青柳】

コメントには「生きのびた日和山」とある。れっきとした「山」は、雑然とした画面からかろうじて津波と地盤沈下に耐えて「生きのびた」感じが出ている。

住作

中村輝一(宮城県仙台市)
『奇跡の一本松』
岩手・陸前高田



【齋藤】
奇跡の一本松の写真はいろいろ見たが、手前に船が置かれていた珍しいアングル。曇天の空の選び方が良かった。

【青柳】

船の前に配した奇跡の一本松。この木が変化する街の様子を見守ってきた。背景は海ではなくて、工事中の防潮堤であることが「今」を感じる。

村上淳(宮城県気仙沼市)
『復興住宅を望む』
宮城・気仙沼



【齋藤】
闇夜に浮かび上がる復興住宅のビルの明かり。まだ未開発な周囲の暗さが明かりを際立たせる。うまい撮り方です。

【青柳】

煌々と電気で照らされた復興住宅。空に明るさが残る頃なら、むしろ美しい写真になったはずだが、そうなるこの独特の雰囲気を持った写真にはならなかったろう。

大橋政博(宮城県仙台市)
『剣舞の子』
岩手・山田



【齋藤】
子どもたちの表情がいい。男の子は真剣なまなざしで、女の子は周りを気にしている様子が面白いです。

【青柳】

子どもたちが舞う伝統の踊りは、次世代に受け継がれるものとして大切なものだ。腰を下ろした瞬間の子どもの真剣な表情と形の面白さの対比がいい。

市川清一(青森県八戸市)
『奇跡の鳥居』
青森・八戸



【齋藤】
群れるウミネコと鳥居と太陽が三位一体になった写真。太陽の位置が大変いい。なかなか狙えない写真です。

【青柳】

鳥・鳥居・夕陽のシャッターチャンスもすばらしいが、この鳥居がアメリカ・オレゴンに流れ着いたものが返還されたものだという奇跡の話を知って、2度衝撃を受ける。

庭野陽子(福島県いわき市)
『鎮魂の舞』
福島・いわき



【齋藤】
空を切って焚火をもう少し入れていたら、さらに良かったろう。リーダーに合わせて踊る姿が、いかにも楽しそうだ。

【青柳】

ユーモラスな雰囲気漂い、最初何をやっているのだろう？と思議に思った写真。火を焚いて、鎮魂の舞を踊る人たちだということで、逆に驚かされた。

東北お遍路写真コンテスト・俳句コンテスト当選者発表

【最優秀賞】

仙台牛ギフト券1万円分+東北お遍路ガイドブック

● 写真の部

藤島純七様

● 俳句の部

吉川香廉様

【優秀賞】

南三陸町山内鮮魚店の干物セット「松」5千円分+東北お遍路ガイドブック

● 写真の部

佐々木均様/佐藤裕様

● 俳句の部

安達英雄様/半田良浩様

【佳作】

相馬市山形屋本醸造特選醤油2千円分+東北お遍路ガイドブック

● 写真の部

木村直紀様/鈴木久雄様/門林泰志郎様/三浦りょう子様

横山光太郎様/中村輝一様/村上淳様/大橋政博様

市川清一様/庭野陽子様

● 俳句の部

南部努様/菊地十首様/田代フサエ様/二階堂光江様

掘卓様/豊島喜美子様/林美佐子様/大内秀夫様

曾根新五郎様/増田信雄様

【入選】

東北お遍路ガイドブック

● 写真の部

渡邊興次様/佐藤広和様/庄子源六様/川村裕信様

高橋成尚様/川崎いづみ様/中込隆様/小檜山裕行様

橋本真紀子様/カマタニヒサト様/宮城武雄様/桜庭義孝様

小松隆夫様/小林昶直様/高橋達也様/山本正彦様

桑原秀美様/守屋正安様/藤原栄一様/中川美智子様

柏館健様/加藤智恵子様/庄司喜一様/橋浦文夫様

洞口貞孝様/橋浦忠志様/伊藤美早子様/宮崎遼様

佐藤笑美子様/佐藤義博様/小澤祐二様

● 俳句の部

小松隆碧様/海老沢法導様/木寺洋子様/齋藤美保女様

藤原知子様/羽矢真人様/岸浩子様/柴田昌子様

菊池節子様/梅田昌孝様/満保千里様/半田真理様

鈴木梨花様/青木美葉様/今順子様/阿部ゆき子様

皆川ミエ子様/齋藤スミ子様/佐野享保様/松澤ふさ子様

村上つね子様/池添恰子様/永井径様/長瀬道子様

中野筈子様/橘家玉蔵様/手嶋建元様/高橋富久江様

迪方温峇様/久保田聡様/高橋英夫様/有瀬こうこ様



「第3回東北お遍路写真コンテスト・第2回東北お遍路俳句コンテスト作品集」

初版発行：2019年2月2日

編集・発行：一般社団法人東北お遍路プロジェクト

仙台市太白区長町三丁目9-10(エフエムたいはく内) ☎022-717-5805

URL <http://tohoku-ohenro.jp> E-mail info@tohoku-ohenro.jp

©Touhoku ohenro contest 2018 無断転載禁止